国道バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成４年度

１９９３．３

香川県埋蔵文化財研究会

例　　言

1　本書は，国道バイパス建設に伴い平成４年度に実施した埋蔵文化財調査の概要を記録したものである。

2　本調査は，建設省四国地方建設局からの委託を受け，香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3　本年度の調査組織は，以下のとおりである。

総括	所　長	松本　豊胤			
	次　長	市原　敏則			
総務	係　長	土井　茂樹			
	係　長	今田　修			
	主任主事	黒田　晃郎（平成４年５月31日まで）			
	主任主事	大西　健司（平成４年６月１日から）			
調査	文化財専門員	西村　尋文			
（発掘）	文化財専門員	高月　計	（整理）	技　師	森　格也
	主任技師	大久保徹也		技　師	古野　徳久
	調査技術員	高橋佳緒里		技　師	宮崎　哲治

4　調査にあたっては，次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同敬称省略）
高松市鶴尾出張所，鶴尾地区連合自治会，上天神南部自治会，沖池水利組合，仲南町教育委員会，買田地区連合自治会

5　本書の執筆は西村・大久保・古野・宮崎が行い，編集は西村が担当した。

6　本書で使用した遺構略号は，次のとおりである。
ＳＨ：竪穴住居　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＲ：自然河川　ＳＥ：井戸
ＳＫ：土坑　ＳＴ：土壙墓　ＳＰ：ピット　ＳＡ：柵列　ＳＸ：不明遺構

7　挿図の一部は，国土地理院地形図（1/50,000）を使用した。

本分目次

Ⅰ　平成４年度調査概要……（西村）…１
Ⅱ　発掘業務の概要
　１．上天神遺跡……（大久保）…５
　２．買田岡下遺跡……（大久保）…９
Ⅲ　整理業務の概要
　１．林・坊城遺跡……（宮崎）…21
　２．前田東・中村遺跡……（古野）…23

挿図目次

第１図　遺跡位置図……３・４
第２図　周辺地形図……５
第３図　遺構配置図……６
第４図　大溝断面図……７
第５図　出土遺物……８
第６図　周辺地形図……９
第７図　調査区割図……９
第８図　Ⅱ区遺構配置図……12
第９図　平安期出土遺物……13
第10図　Ⅰ区中部遺構配置図……14
第11図　SD37出土資料(1)……16
第12図　SD37出土資料(2)……17
第13図　縄文土器実測図……22
第14図　Ｃ区自然河川内出土木製品……24

表目次

第１表　平成４年度国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査一覧表……２
第２表　国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査年度別一覧表……２
第３表　SD37出土資料観察表……18
第４表　林・坊城遺跡整理作業工程……21
第５表　前田東・中村遺跡整理作業工程表……23

写真目次

写真１　掘立柱建物（北群）……５
写真２　大溝検出状況……７
写真３　SD37断面……10
写真４　SD40・41全景……10
写真５　SD40・41断面……10
写真６　SD37遺物出土状況……11
写真７　SB21……11
写真８　SB22～24……11
写真９　Ⅱ区包含層及び畦畔……13
写真10　Ⅰ区中部全景……13
写真11　Ⅰ区中部掘立柱建物群……14
写真12　方形土坑（板材敷設）……14
写真13　Ⅰ区東部畝状遺構……15
写真14　SK45土壙墓……15
写真15　方形土坑（樹皮敷設）……15
写真16　SD37遺物出土状況……16
写真17　Ⅱ区全景……19
写真18　Ⅱ区埋積谷、縄文土器出土状態…20
写真19　Ⅵ区全景……20
写真20　林・坊城遺跡整理作業風景……22
写真21　前田東・中村遺跡整理作業風景…24

Ⅰ．平成４年度調査概要

平成４年度の国道バイパス埋蔵文化財調査業務は，昨年同様発掘調査と整理業務よりなる。本年度の発掘業務は一般国道11号高松東道路と一般国道32号満濃バイパスの調査である。

高松東道路の調査は昭和62年より開始された継続事業で，今年で６年目にあたる。本年度は昨年度の継続で，高松市上天神遺跡，調査対象面積5,300m²の調査を平成４年４月より同年７月まで実施した。この調査では，弥生時代前期の自然河川及び弥生時代後期・中世の小規模な集落等が確認された。本年度の調査で高松東道路関連の上天神遺跡の調査は全て終了した。なお，上天神遺跡の調査が終了したことにより，高松東道路の上天神・前田間で未調査として残るのは，前田東・中村遺跡の一部，1,620m²を残すだけになった。

満濃バイパスの調査は本年度より開始する新規事業で，ルート上には仲南町買田岡下遺跡，満濃町吉野下秀石遺跡等が確認されている。本年度は仲南町買田岡下遺跡，調査対象面積8,000m²の調査を平成４年８月より平成５年３月まで実施した。この遺跡からは弥生時代後期～古墳時代前期，平安時代前半，室町時代前半の遺構が検出された。特に平安時代前半の遺構群には大形の掘立柱建物が数棟検出された。また，出土遺物の点でも帯金具・緑釉陶器などの遺物が出土し大変注目される。これらの遺構・遺物より想定すれば，今回検出された建物群は有力者の屋敷跡の一部である可能性が高く，この地域の古代集落の研究を進めるうえで大変貴重な資料になった。なお，本遺跡の調査は本年度で終了した。

整理業務は昨年度からの継続で林・坊城遺跡，本年度より新たに前田東・中村遺跡の整理作業を開始した。また，昨年度整理作業が行われた東山崎・水田遺跡の報告書は本年度に刊行した。なお，これらの遺跡は全て高松東道路建設に伴う調査によるものである。

林・坊城遺跡は，調査対象面積29,200m²で，昭和63年度に発掘調査を行ったものである。この遺跡は縄文時代晩期から中世までの遺跡で，検出された自然河川からは縄文時代晩期の木製農耕具が出土するなど大変注目される内容をもっている。整理作業は本年度に終了した。なお，報告書は来年度に刊行される予定である。

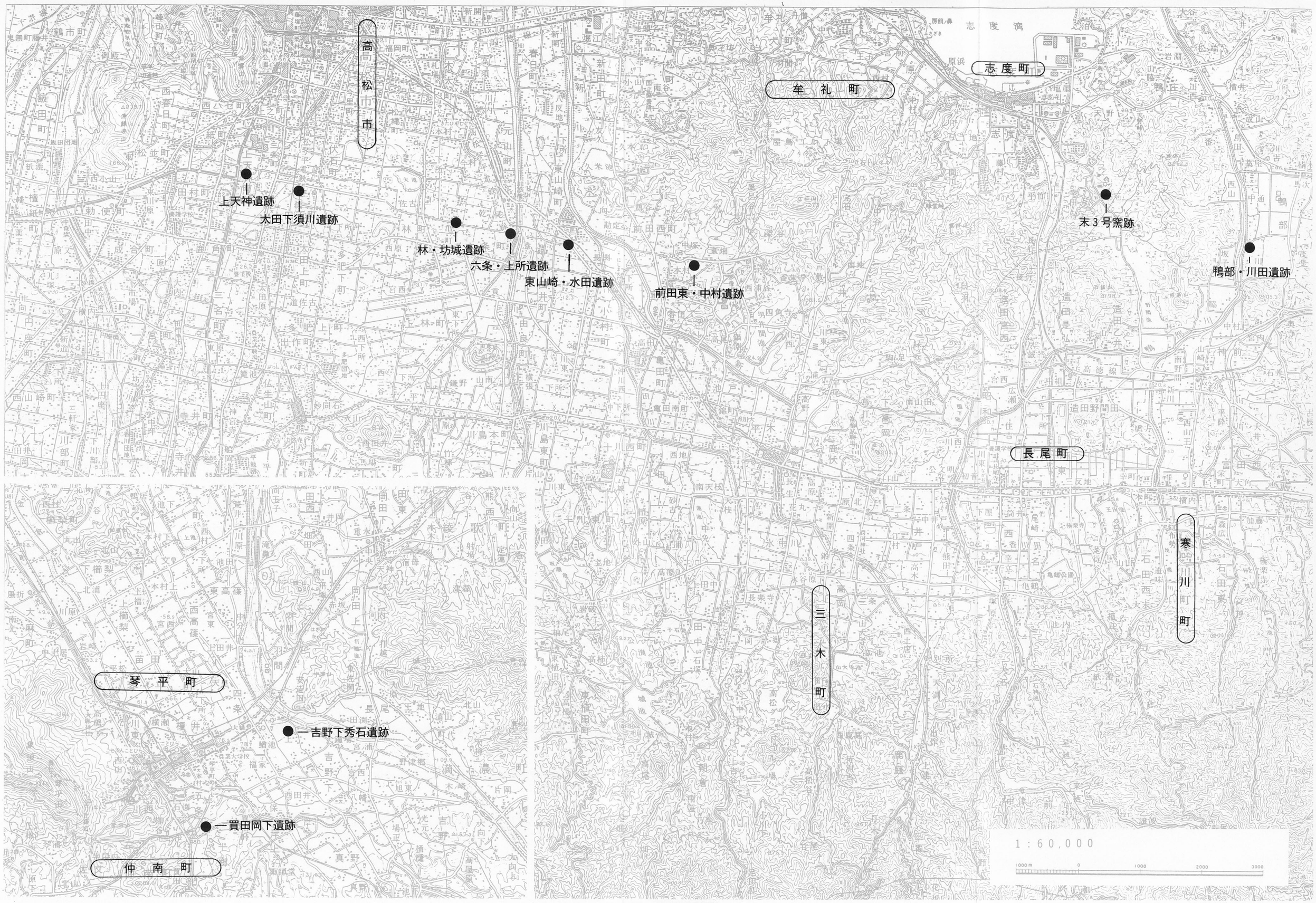
前田東・中村遺跡は，調査対象面積34,300m²で，このうち昭和63年より平成３年まで32,680m²の発掘調査を行ったものである。この遺跡は縄文時代から近世までの遺跡で，自然河川出土の縄文時代後期の遺物，平安時代の大規模な集落跡など，高松東道路関連の調査の中でも大変注目される遺跡である。本年度の整理作業は遺物の整理を主体に進めた。なお，整理作業は来年度も継続される予定である。

	遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調査期間	調査担当者	備　考
発掘	上天神	高松市上天神町	5,300m²	平成4,4～7	大久保・高月・高橋	
	買田岡下	仲多度郡仲南町十郷	8,000m²	平成 平成 4,8～5,3	大久保・高月・高橋	
整理	林・坊城	高松市林町	—	平成4,4～9	宮崎	
	前田東・中村	高松市前田東町	—	平成 平成 4,4～5,3	森・古野	
	東山崎・水田	高松市東山崎町	—	—	—	報告書刊行
合計			13,300m²			

表１　平成４年度国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査一覧表

事業別		遺跡名	調査対象面積	年度別調査面積						備考
				昭和63年度	平成元年度	平成２年度	平成３年度	平成４年度	次年度以降	
一般国道11号高松東道路	上天神・前田東間	上天神	24,800	12,600	0	0	1,900	5,300	0	昭和62年度に5,000m²調査
		太田下・須川	25,000	0	24,170	830	0	0	0	
		林・坊城	29,200	29,200	0	0	0	0	0	平成３・４年度整理実施
		六条・上所	31,180	30,310	0	0	870	0	0	
		東山崎・水田	25,400	25,400	0	0	0	0	0	平成４年度報告書刊行
		前田東・中村	34,300	16,170	9,320	2,485	4,705	0	1,620	平成４年度整理実施，継続予定
	三木・津田間	鴨部・川田	12,000	0	0	5,000	7,000	0	0	
		末３号窯	3,939	0	0	0	3,439	0	500	
一般国道32号満濃バイパス		買田岡下	8,000	0	0	0	0	8,000	0	
		吉野下秀石	8,500	0	0	0	0	0	8,500	
一般国道319号善通寺バイパス		京免	2,200	2,200	0	0	0	0	0	昭和63年度報告書刊行
一般国道32号円座バイパス		香川郡条里	150	150	0	0	0	0	0	
合　計（m²）			204,669	116,030	33,490	8,315	17,914	13,300	10,620	

表２　国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査年度別一覧表


高松市
牟礼町
志度町
長尾町
寒川町
三木町
琴平町
仲南町
上天神遺跡
太田下須川遺跡
林・坊城遺跡
六条・上所遺跡
東山崎・水田遺跡
前田東・中村遺跡
末3号窯跡
鴨部・川田遺跡
一吉野下秀石遺跡
一買田岡下遺跡
1:60,000

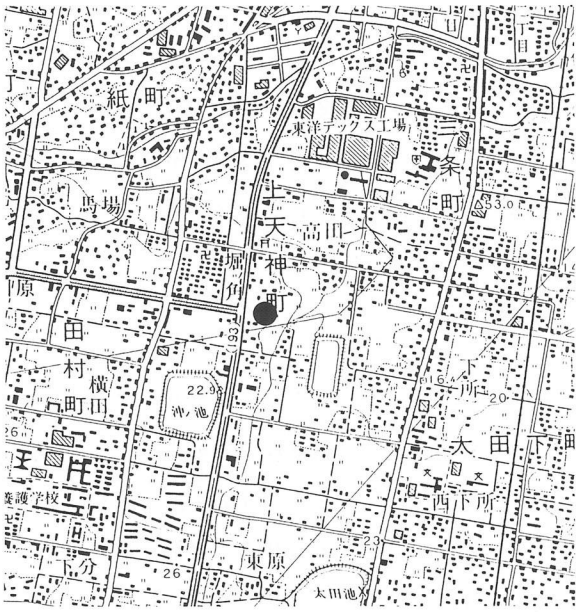
第1図　遺跡位置図

II．発掘業務の概要

1．上天神遺跡

（1）　環境

上天神遺跡は高松平野中央部にあって香東川旧河道の東岸に位置する。周辺の海抜高は16m前後を測る。有力な前期古墳群の展開する石清尾山山塊は旧香東川を挟んで本遺跡の北西約２kmにある。周辺は概ね北東方向に流下する香東川系統の小河川が網目状に分布し，本遺跡も御坊川支流古川などによって限られた２つの微高地と周囲の旧河道からなる。



第２図　周辺地形図

（2）　調査概要

本年度調査は昨年度に引き続き古川西岸地区を対象として実施した。この地区はかなりの削平を蒙っており，遺構の残存状況は概して良好ではない。東端は古川とその氾濫原低地帯にあたる。

調査区の中央部には幅７～18m，深さ１m程度の小規模な旧河道３筋を検出した。いずれも堆積土下層に弥生時代前期後半，同上層に弥生後期の遺物若干量を包含する。図示した石器は下層出土資料である。これらは形状・埋没状態等からつよく蛇行した単一の河道の可能性もある。旧河道東側では弥生時代後期の掘立柱建物群を，西側では弥生時代の大形溝を中核とする溝群を検出した。調査区中央部で中・近世の建物２棟を検出した。また古墳時代後期～奈良時代の遺物が全域から小量ずつ出土している。

（3）　弥生時代後期の掘立柱建物群

古川低地部寄りの部分で弥生時代後期中葉の掘立柱建物４棟を検出した。南北２群に分かれ，北群では２間×１間１棟，１間×１間１棟が重複する。南群では１間×１間２棟が接している。遺構の残存状態からすれば１間×１間３棟は竪穴住居残欠の可能性もある。またこれらをとり囲むように３条の小溝がめぐる。

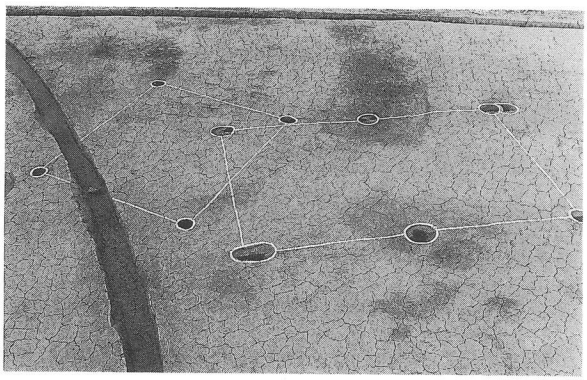


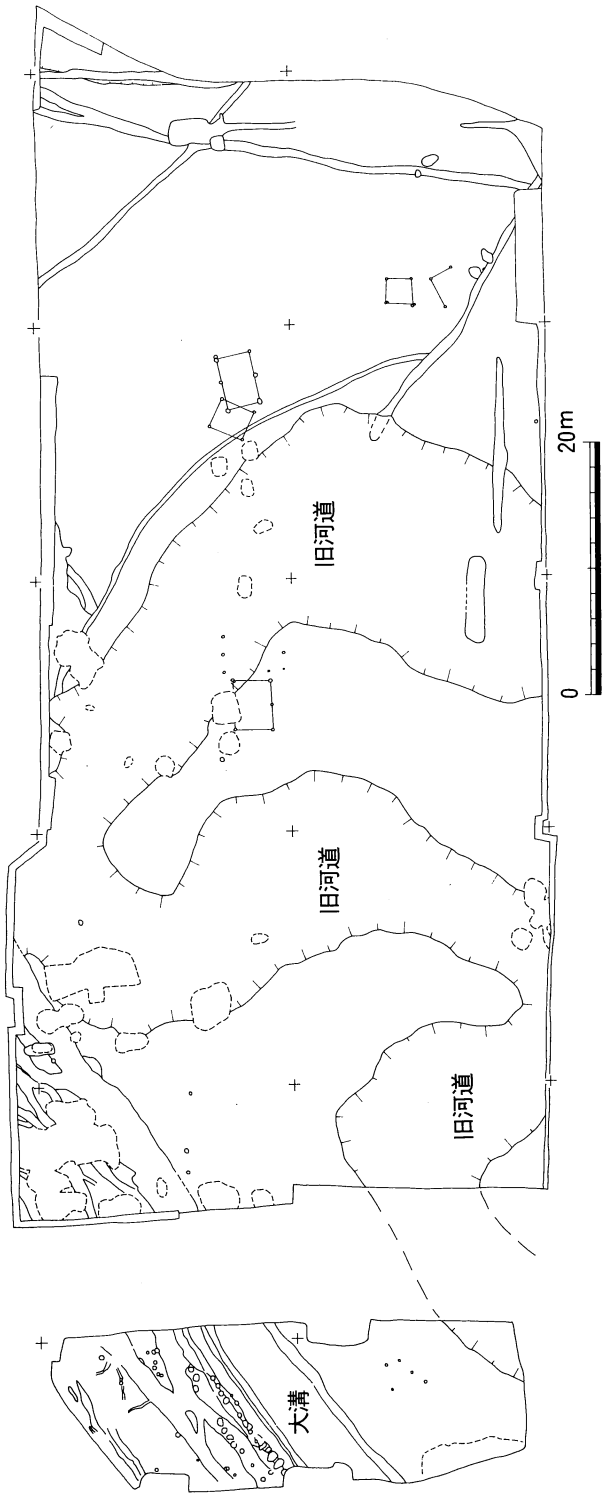
写真１　掘立柱建物（北群）

（4）　大溝など

調査区西端で検出した大溝は東北方向に流下し，最大幅７m，深さ0.8mを測り断面逆台形状を呈する。断面観察から少なくとも３回以上の改修が想定できる。最下層に残存する改修前の堆積層から弥生時代前期後半の資料若干を，最終埋没時堆積層からは弥生時代後期後半の資料をそれぞれ出土している。長期間にわたって維持された溝であることがわかる。また本溝と並行し，あるいは分岐する５本以上の小溝群が伴う。検出位置・流下方向などから考えて，大溝を含めたこれらの溝群は旧香東川ないしはその支流から取水する潅漑水路と思われる。随伴・分岐する多数の小溝群の存在は緻密な配水計画に基づく水路網の存在を想定させる。また開削が前期に遡るとすれば，その規模から考えて興味深い資料といえよう。

（5）　出土遺物

１～７は大溝出土土器，８～10は旧河道出土石器である。１は逆Ｌ字口縁，ヘラ描沈線の甕，２は壺肩部で沈線文がある。共に弥生時代前期後半，大溝最下層出土で開削年代に近い資料であろう。３は「く」字口縁甕で中期中葉，大溝下層出土。４は口縁部を拡張した甕，５は口縁部上端を拡張した高坏で共に後期初頭，大溝上層出土，６は鋭く折れて短く開く口縁部の端部を小さく摘みあげる。体部外面上半縦ハケ，下半ヘラ磨き，内面上半指押さえで下半はヘラ削り。７は高坏坏部。共に後期後葉，大溝最上層出土。なお後期以降の資料はすべて下川津Ｂ類土器。



第３図　遺構配置図

8，9はサヌカイト製扁平打製石斧，9は刃部折損　10はサヌカイト製打製石包丁。両端辺に抉りを有し，その周辺が磨耗する。旧河道出土の弥生前期石器類は石包丁，打製石斧，石鏃等があるがすべてサヌカイト製。

（6）　まとめ

本年度調査で，小溝に囲まれた計4棟の掘立柱建物もしくは竪穴住居からなる小集落単位を検出した。同様の規模の小規模住居グループは上天神遺跡周辺に限っても太田下須川遺跡や浴長池遺跡で弥生時代中後期の例を確認している。これらはかつて「単位集団」のモデルとされた岡山県津山市の沼遺跡と同質の単位と考えられ，当該期の主要な集落類型のひとつである。

昭和62年度調査では三条池北側部分でこれとは異なる形態の集落の一部を確認した。大形の南北溝に挟まれた東西100mほどの範囲を中心に掘立柱建物・竪穴住居が密集する弥生時代後期初頭の集落で，他地域系の土器・石器も多く出土している。おそらくこの地域の拠点集落のひとつであろう。

このように，ようやく本地域においても拠点集落を核に小集落が展開する弥生期の景観を具体的資料で描き得る段階にきた。集落間の連関の具体的様相を明らかにすることが今後の課題である。その際に今年度調査で確認した大形潅漑用水路の問題は重要である。その開削と管理は集落を連結させる重要な契機のひとつであることは間違いない。

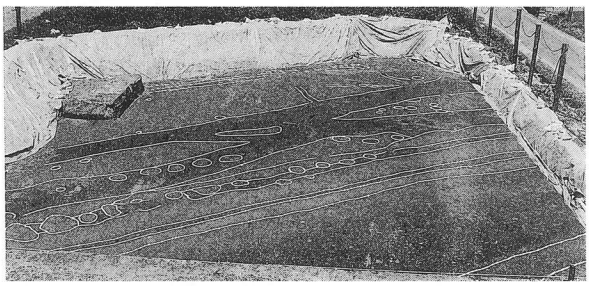
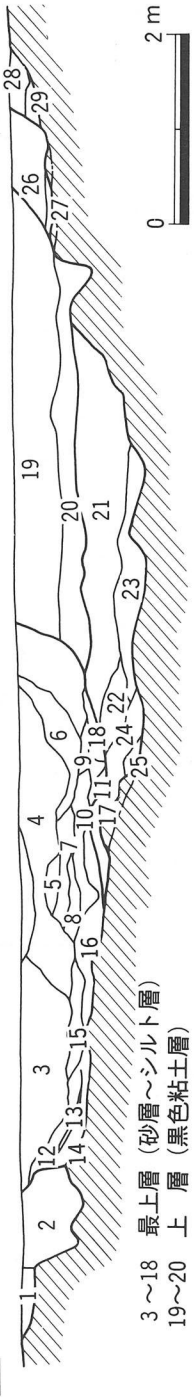
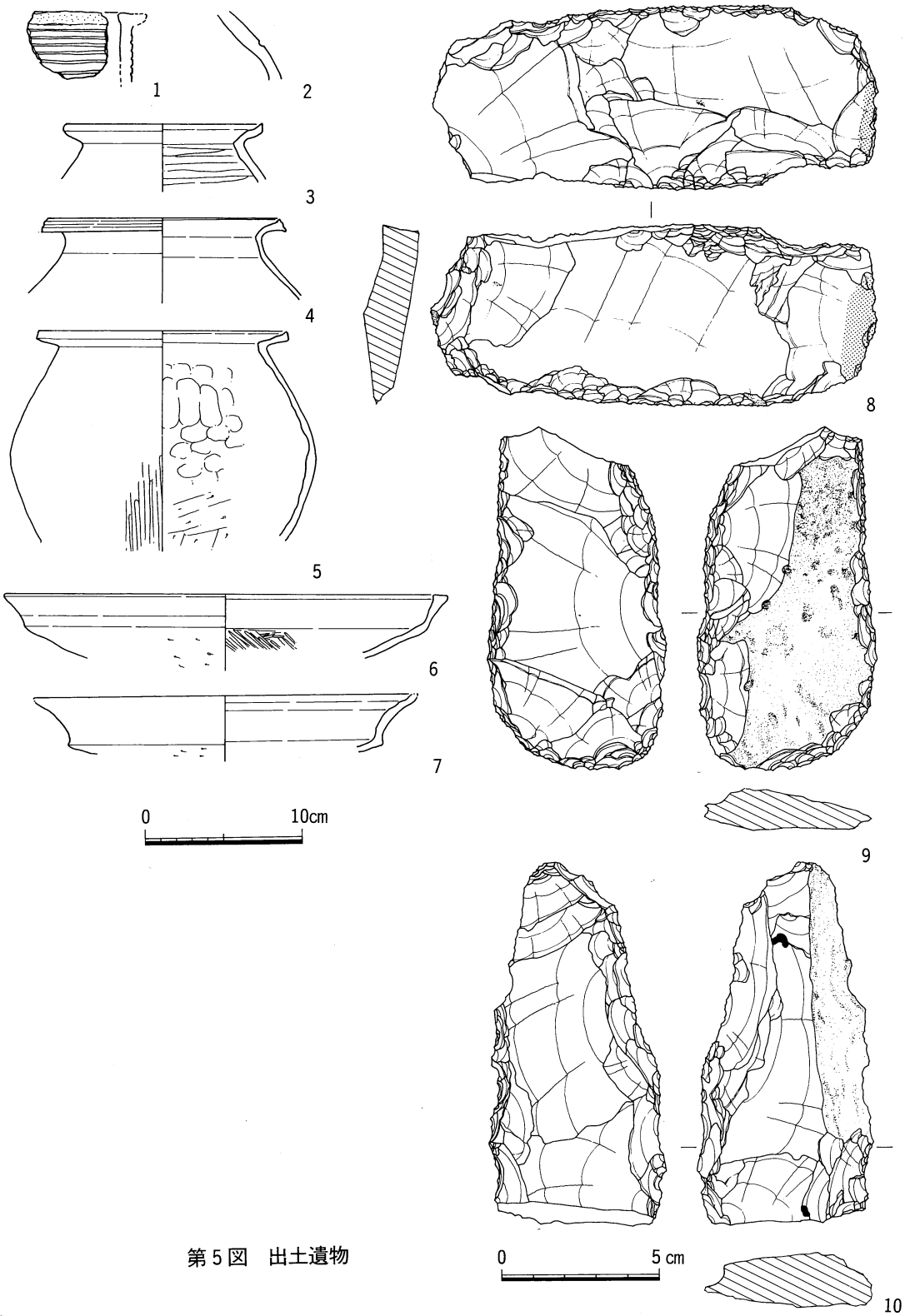


写真2　大溝検出状況



第4図　大溝断面図



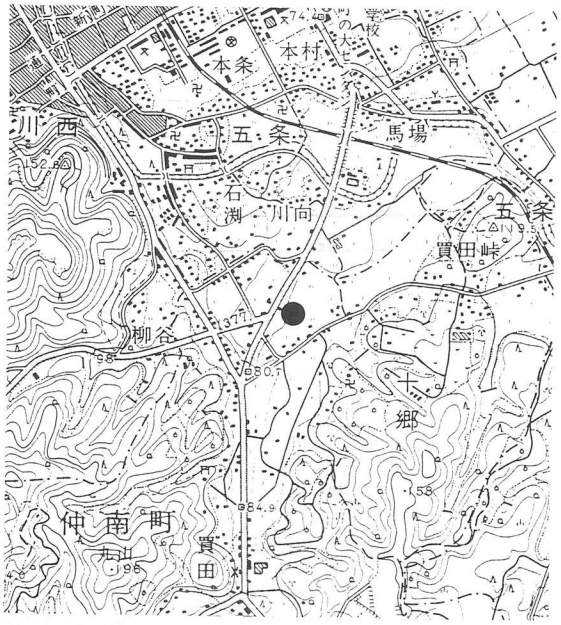
第５図　出土遺物

2．買田岡下遺跡

（1）　環境

本遺跡は仲多度郡仲南町買田地区の丘陵北裾部，標高80m前後の緩傾斜地に所在する。金倉川支流の小河川，買田川が対象地の西から北をめぐって流れ，山裾の緩斜面部を深く穿っている。

背後の丘陵上には古墳時代中・後期の小古墳群の存在が知られるがその実態は詳らかではない。また白鳳期創建の弘安寺は金倉川を挟んで約1.3km北方に位置する。律令制下，那珂郡真野郷は金倉川湾曲部以南の南岸部分一帯に比定され，買田地区はその西部に位置するが，以東の地区とは標高120m前後の買田峠の丘陵によって隔てられており，鎌倉期には園城寺領買田庄が成立する。



第６図　周辺地形図

（2）　調査概要

調査は満濃バイパスの起点となる国道32号・同377号分岐点付近から，延長約350m，面積8000㎡を対象として実施した。調査地は南側の丘陵に沿って延び大局的には山裾緩斜面に展開するが，そこから派生する小丘陵・小開析谷数条を横断しており，微細地形をやや変化に富むものとしている。現状では西端の１区画（VI区）が宅地化していた以外はすべて水田となっていた。とくに東半部（III区東部以東）は周囲の圃場整備が完了しており旧地形の観察が現状ではやや困難となっている。

調査区に沿って述べると，VI・Ⅰ区は安定した平坦地形が広がり，耕作土直下で遺構面となる。

第７図　調査区割図

II区は小開析谷の出口部に当たりＩ区に比べ現地表高で約40cm低くなり，耕作土下には最大厚60cmあまりの遺物包含層が存在し，その下面が遺構面となる。III区西部からIV区中央部にかけては南から派生する小支丘部にあたり最高部でＩ区平坦面と約１ｍの比高を測る。水田造成時の削平及び近年の粘土採取によりこの部分の旧地形は大きく損なわれており，II区に接した側斜面部分に若干の遺構が残存するのみである。調査区東端のＶ区東部も北にのびる小支丘部にあたるが，大きく削平を受けた上に造成土が厚く堆積し旧地形からかなり変容している。この二筋の小支丘間，すなわちIV区東部からＶ区西部は現地形でも明白な谷状の狭い低地をなしておりこの部分で小開析谷２条を検出している。

今回の調査では旧石器時代・弥生時代後期・古墳時代前期・同後期・平安時代・室町時代前半の資料を得た。このうち旧石器時代・古墳時代後期は若干の遺物が出土したのみで，周辺にこの期の遺跡が展開する可能性を指摘できるにとどまる。

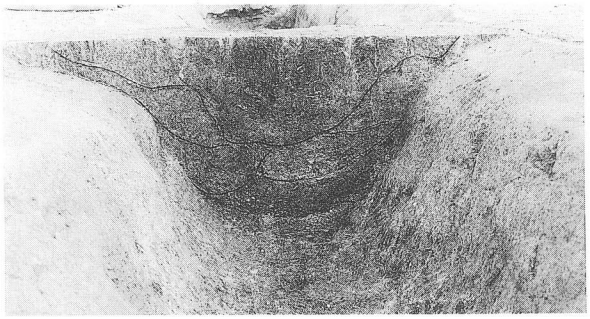


写真３　SD37断面

（３）　弥生時代後期～古墳時代前期

Ｉ区でこの期の溝５条（ＳＤ37 40～43）を検出した。ＳＤ37は上面幅1.3m，深さ0.6mの小規模なＶ字溝で，く字状に屈曲して北に流れる。本溝が半ば以上埋没した段階で古式土師器40個体分以上が投棄されている。出土遺物については項を改めて詳述する。ＳＤ40・41は北流する大形溝で，断面逆台形状を呈し，上面幅2.2～3.0m，深さ0.9～1.3mを測る。これらは最低３回の改修の累積と見られる。出土遺物は多くないが全体として弥生時代後期後半から古墳時代前期に機能したと判断できる。ＳＤ42・43はＳＤ40・41の最終段階に伴う小水路。

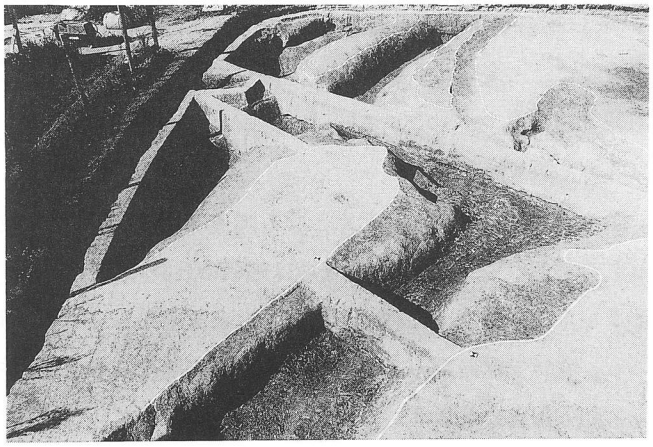


写真４　SD40・41全景

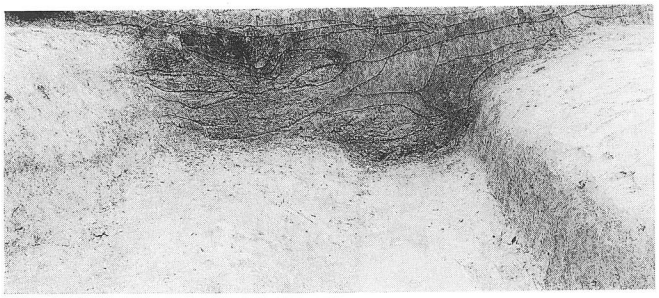


写真５　SD40・41断面

これらの溝群は規模・形態・方向から山裾の谷部より取水して北方低地部に給水する▣漑水路と考えられる。ＳＤ37に多量の土器が投棄されていたことことから隣接地点に当該期の集落域が存在する可能性がある。

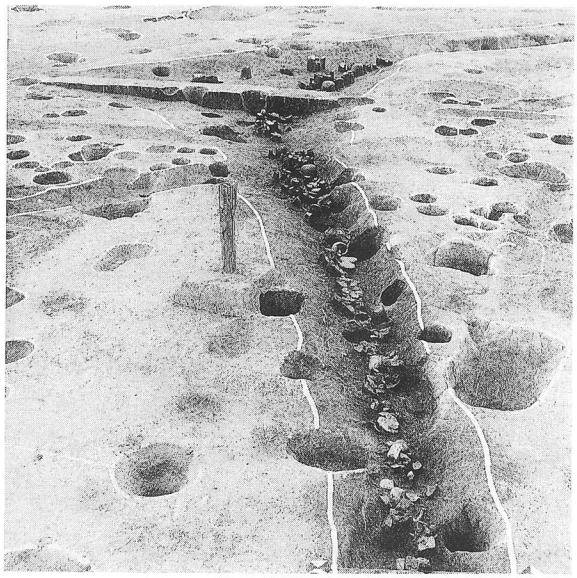


写真６　SD37遺物出土状況

（４）　平安時代

Ⅵ・Ⅱ区で平安時代前半期の建物群，Ⅰ区西端で同時期の小溝群を確認した。Ⅲ・Ⅳ区の開析谷堆積土中にこの期の遺物小量を包含する。Ⅰ区西端部の小溝群はほぼ２m間隔で並行する浅い南北溝群で，畝状遺構の一部と思われる。

Ⅱ区南東部で平安時代前半期の建物４棟以上を検出した。建物群はⅠ区から緩やかに下がった谷出口部の低地から東側丘陵側斜面にかけて展開する。西辺から北辺は小溝によって限られ，東辺はⅢ区西部の小支丘西側面の小溝に区切られる。東西幅52mを測り，南北方向は10m検出している。本建物群の中心部分は南側用地外に位置し，今次調査ではそれの北辺部分を確認したことになる。

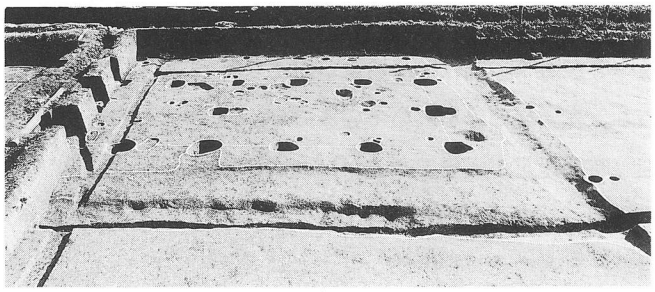


写真７　SB21

ＳＢ20は区画内北西角に位置する大形の東西棟で身舎４間×２間に南面廂を付し，全体で東西8.4m，南北6.4mを測る。ＳＢ21は北辺柱穴列のみを検出しているが東西５間で長9.4mを測る。ＳＢ20より大形の東西棟と見られる。この他，やや規模は劣るが東西２間の柱穴列２列がある。やはり南に延びる建物の一部である。これらの建物軸はＮ８°W～N24°wにあり周辺の現存方格地割りに近似する。

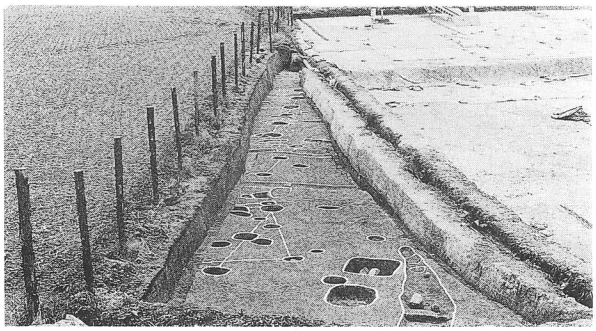


写真８　SB22～24

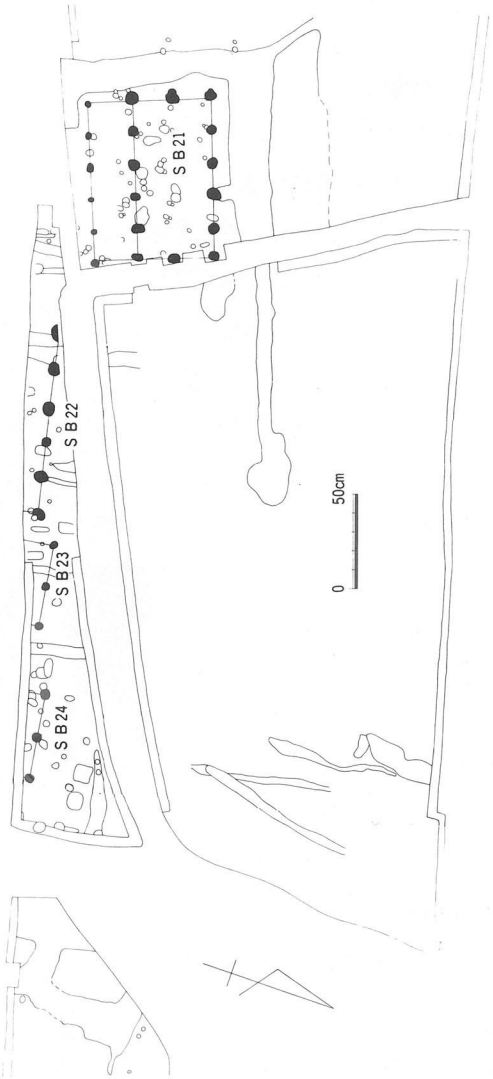
前述のようにⅡ区全体が浅い谷状地形にあり上述の建物など平安期遺構面の上位には20～60cmの厚さで暗灰色シルト系の堆積層がある。同層はミクロに見れば４～５枚に区分し得る薄い水平堆積層の

連続とみなし得る。最下部，すなわち地山層上面が攪拌したように乱れている。9～10世紀を中心に12世紀までの遺物を包含するが層位的に区分することは困難である。最下部まで12世紀代に下る資料が混入する。

また本層の下面で削り出し整形の畦畔状高まり（写9）を検出した。これと堆積状況などから本層は複次に及ぶ水田耕作土層の可能性がある。平安期の建物群廃絶後，おそらく12世紀以降に耕地化し，造成と耕作の繰り返しによって遺構の一部を削平し，耕地化以前の遺物を多量に混入させたものと考える。したがって本層中に包含される遺物の大半は下部の建物群に関連する資料とみてよいであろう。

概ね9～12世紀の須恵器・土師器・黒色土器各種と共に，銅製巡方・丸鞆各1個，緑釉陶器・灰釉陶器，瓦，鞴羽口・鉄滓等がある。瓦は50片前後が出土している。瓦当文部分を欠いているので，詳細な時期比定が困難であるが，凸面には格子叩きか縄席文叩きを見，凹面には布目痕をとどめる。偶発的な混入とは考えがたい出土量であり，今次調査で検出した建物で瓦葺き構造を想定することは困難であるが、周辺にそうした建物が存在した可能性がある。また鞴羽口・鉄滓は，付近に鍛冶工房の存在を想定させる。区画東端付近でまとまった炭・焼土ブロックを検出しておりこの想定を支える。

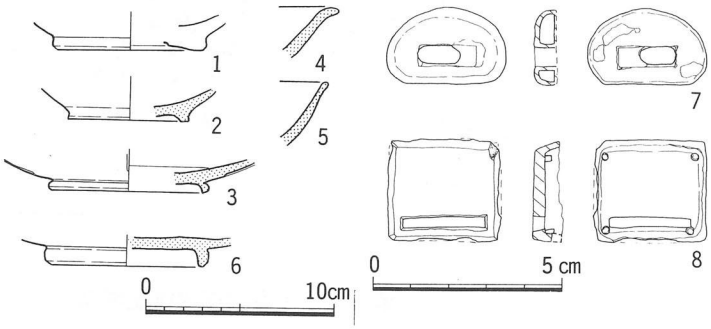
銅製巡方は2.9cm×2.7cm，厚0.7cmを測る。矩形の透かし孔を有し，裏面の四隅には鋲がある。丸鞆は3.2cm×2.0cm，厚0.6cmを測り耳環に似た空芯環状の構造



第8図　Ⅱ区遺構配置図

である。共に金銅装などは見られず，小形品といえよう。

緑釉・灰釉は6点を図示した。1は軟質の緑釉椀。蛇の目高台で全面に淡緑色釉を施す。2は硬質の緑釉小椀，削り出し高台で体部内面にヘラ磨き。淡緑色釉を高台内側以外に施す。見込み部に重ね焼き痕がある。3は硬質緑釉皿，貼り付け高台で，内外面にヘラ磨き。外面に線刻がある。全面に黄灰色釉を施す。4は硬質の緑釉椀。体部内面にヘラ磨き全面に淡緑色釉を施す。5は硬質の緑釉皿，全面に黄緑色釉を施す。6は灰釉陶器椀。貼り付け高台で見込み部に重ね焼き痕がある。3・6が東海産，その他は京都産と考えられる。



第9図　平安期出土遺物

（5）　室町時代前半

この期の遺構はⅠ区中・東部に集中している。Ⅰ区中部では宅地1区画分の過半を検出し，東部では15m×4.5mの範囲で畝状遺構と思われる小溝群を検出した。

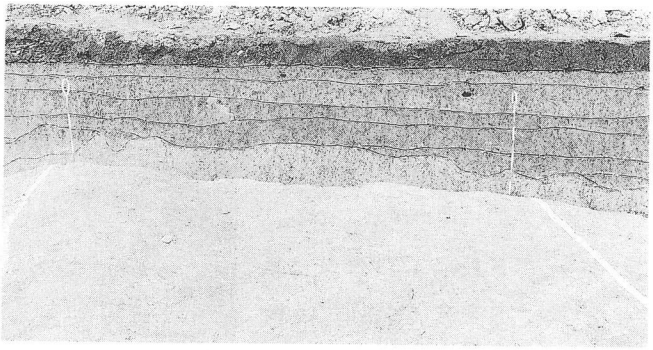


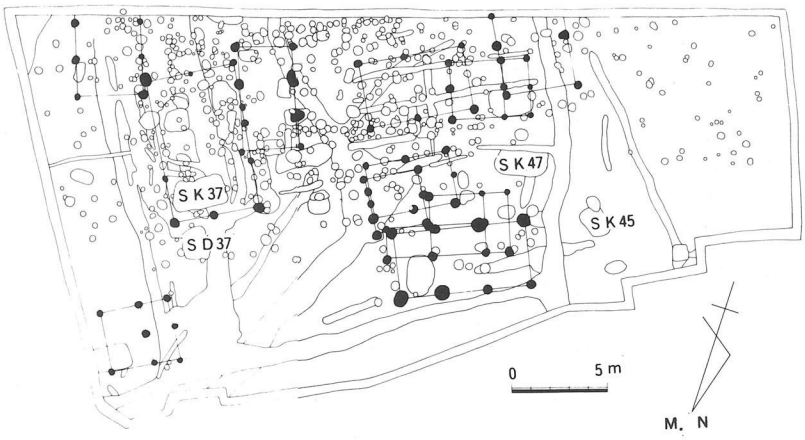
写真9　Ⅱ区包含層及び畦畔

前者では区画溝の東西北の3辺を確認している。南辺は調査地外となる。また東辺は小溝が錯綜しており，幾度か区画の改変が計られたものかもしれない。想定される宅地の規模は東西20m，南北20m以上と，当該時期の宅地としては決して大きくなく区画施設も貧弱である。

主に区画施設の内部から800基にのぼる柱穴等を検出した。柱穴をはじめとして遺構の重複は著しく建物の復元は困難であるが，少なくとも区画内で9棟以上，外で1棟を復元した。しかし建物配置を議論する程度には至っていない。

写真10　Ⅰ区中部全景

宅地規模同様に建物規模も



第10図　Ⅰ区中部遺構配置図

比較的小形で最大でも4間×2間，面積37m²にすぎない。またこのほか8基検出した方形土坑が注目できる。それらは一辺0.9m～2.9mと格差が大きいが平面・断面形態共にかなり整った形状を呈し，しばしば人為的に埋め戻している。これらのうちSK47（写12）では床面に板材を，SK37（写15）では樹皮を各々敷き詰めた痕跡が認められた。これらは貯蔵施設で廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。また多くの方形土坑が建物内部に納まる位置関係にあり，屋内に設けられた貯蔵施設であろう。

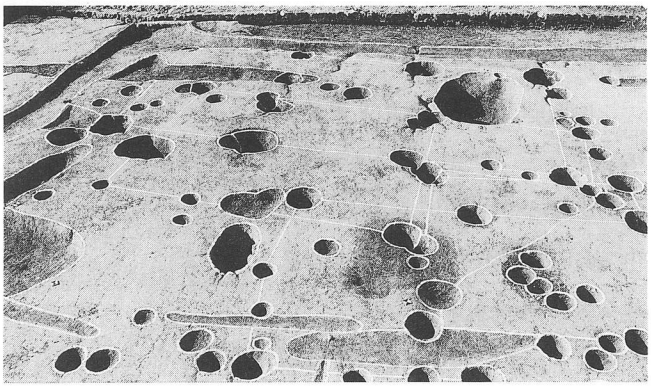


写真11　Ⅰ区中部掘立柱建物群

SK45（写14）は南北主軸の土坑墓で宅地西辺溝の外方に単独で営まれる。遺骸は残存していないが短刀1口を副葬する。

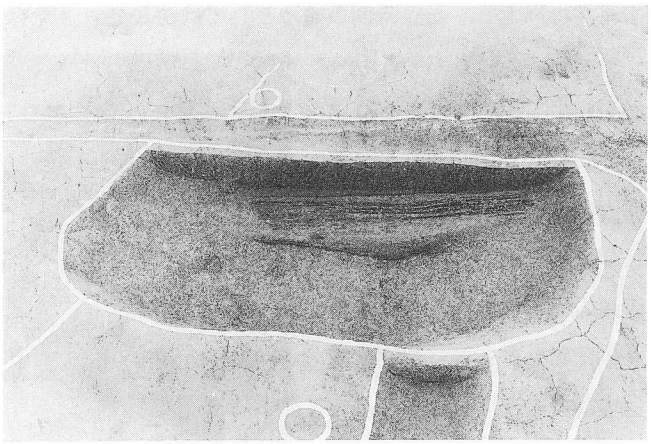


写真12　方形土坑（板材敷設）

土師質羽釜・土鍋・小皿・コネ鉢などの日常雑器類以外の遺物が乏しい。輸入陶磁器類は若干の細片を見るにすぎない。また鉄製品についても刀子片の他，釘・鎹等の建築材小量を検出したにとどまる。

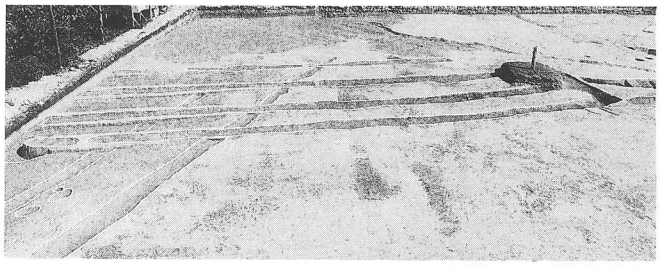


写真13　Ⅰ区東部畝状遺構

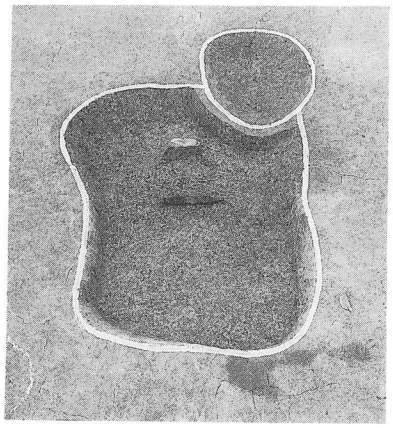


写真14　SK45土壙墓

（6）　ＳＤ37出土土器について

前述したとおり，ＳＤ37上層から良好な古式土師器の一括資料を得た。確認した器種と推定個体数は次の通りとなる。二重口縁壺３，広口壺３，甕15，高坏８，小形鉢８，有孔鉢１，小形器台１，小形壺５。

当地方では二重口縁壺は下川津Ⅵ式期から一般化する。その段階では口縁立ち上がり部の反りの強い形態であるが，本資料ではその部分がややだれた後出的な形態に変化している。広口壺では口縁部がラッパ状に開く形態と，頸部中位で強く折れて口縁部が短く水平に開く形態とがある。口縁部に文様帯をもつ例はない。甕は３種ある。やや反り気味に短く開く「く」字状口縁を持ち，体部に叩き目を残し，内面ヘラ削りが上端に及ばない伝統的形態，短く開く「く」字口縁の端部を弱く摘みあげ，体部外面は緻密な斜ハケで仕上げ，内面下半ヘラ削り，上半部に顕著な指押さえを残した形態，およびやや内湾気味に伸びる口縁部で端部を小さく肥厚させた形態がある。後２者は各々東阿波型甕，布留甕の模倣形態と見られる。量的には東阿波型甕模倣形態が多い。吉備系の二重口縁甕は見られない。高坏の坏部はやや深目で中位の屈曲は鋭いが上半部はあまり開かない。脚部はやや中膨らみの筒状の軸部から強く折れて短く開く裾部をもつ。脚部に透かし孔はない。また外面ハケ調整が多いがヘラ磨きも認める。小形鉢はいずれも浅目の椀形態で丸底。非常に粗雑化しており，多くの個体で外面に絞り目状の細かい亀裂を認める。小形器台は脚部が長

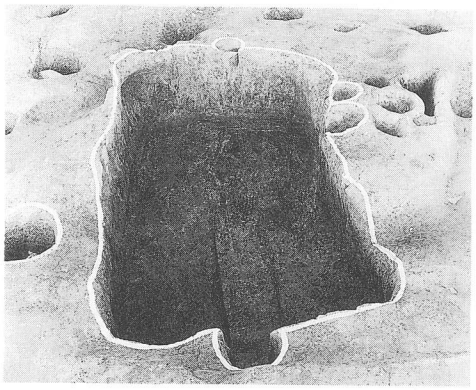


写真15　方形土坑（樹皮敷設）

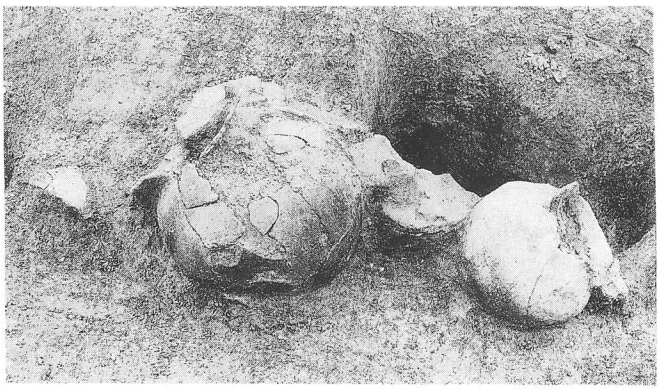
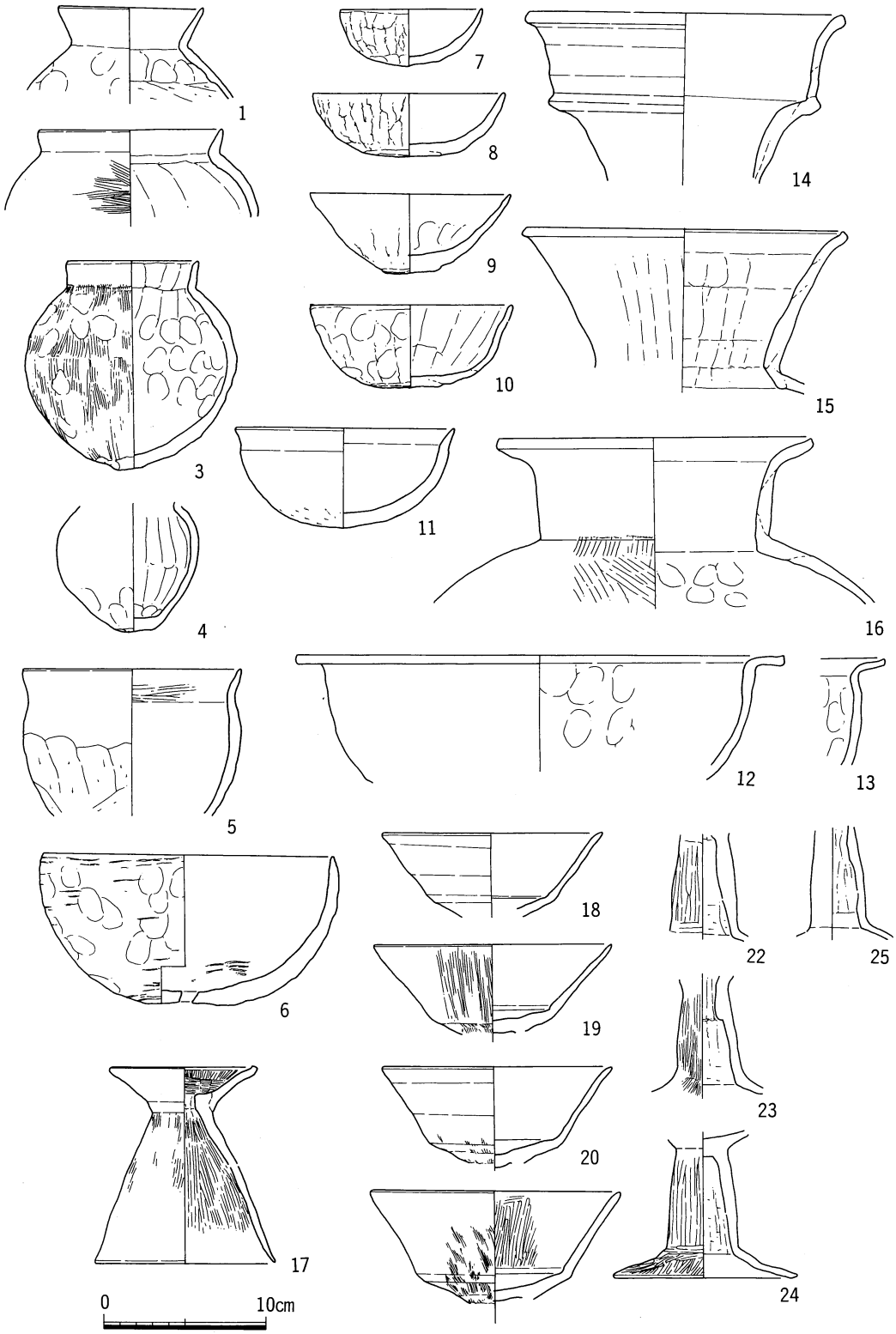


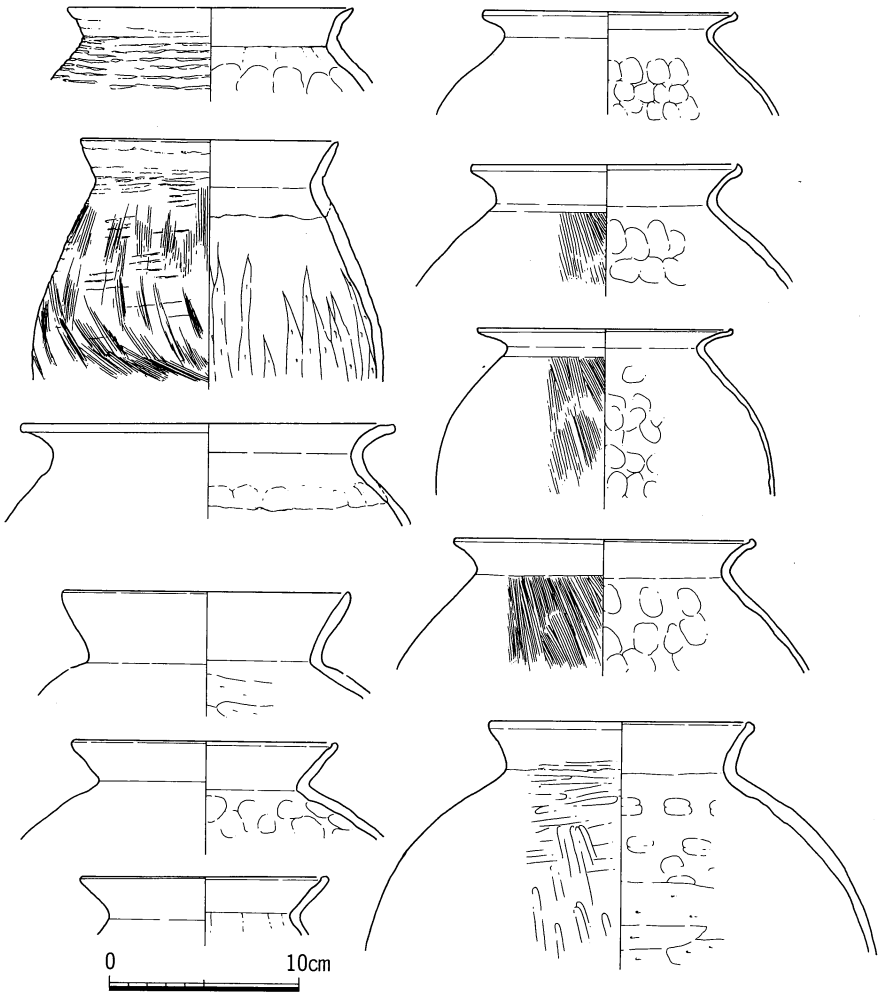
写真16　SD37遺物出土状況



第11図　SD37出土資料(1)

く調整はやや粗雑，坏部は貫通孔がある。小形壺は張りの弱い体部に短い口縁部を付す形態。全体に分厚く調整も比較的粗雑である。

上記した諸点および，小形丸底土器や小形精製鉢を欠くこと，高坏が増加して小形鉢に匹敵する量に達していること等が本資料の特徴である。こうした点から本資料は布留式古段階に並行すると考える。本地域の土器編年に照らせば，下川津VI式とVII式の間の空白期の一部を埋める内容である。既存の資料では一定の地域差を考慮に入れつつも豊中町延命遺跡ＳＤ16資料に最も近く，これよりもやや後出するとみられる。



第12図　SD37出土資料(2)

番号	器種名	出土地点	口径	器高	形態の特徴	調整の特徴	胎土	色調
1	小形壺	MKO-D037-№53	9.0		直線的に伸びるやや短い口縁部	口縁部－横ナデ 体外－ナデ 指押さえ 体内－上端部指押さえ 以下横ケズリ	2㎜大の砂粒	黄白橙色
2	小形壺	MKO-D037-№20	11.3		短い直口縁	外－横ハケ 内－ナデ	1㎜大の砂粒少量	黄白色
3	小形壺	MKO-D037-№46	7.8	12.7	短く直立する口縁部、球形の体部で丸底	口縁部－横ナデ 体外－ハケ 指押さえ 内－指押さえ	2㎜大の砂粒多い	黄灰色
4	小形壺	MKO-D037-№1			張りの弱い体部で小さい底部をもつ。	内外－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	黄灰色
5	小形壺	MKO-D037-№54	13.1		頸部は弱くくびれ、口縁部は短い。 体部の張りは弱い。	口縁部－横ナデ 体外－下半ヘラ削り 内－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	淡褐色
6	有孔鉢	MKO-D037-№3	17.5	9.2	やや内湾気味に立ち上がり口縁端部は尖る。 底部焼成前穿孔	外－並行叩きをナデ消す 内－ナデ 底面付近に叩き目残す。	1－2㎜大の砂粒	黄灰色
7	鉢	MKO-D037-№33	8.8	3.6	浅目の箱形に近く、口縁端部は尖る。	外－絞り目状亀裂 内－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	黄灰色
8	鉢	MKO-D037-№42	11.6	3.9	浅目の箱形に近く、口縁端部は尖る。	外－絞り目状亀裂 内－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	淡橙色
9	鉢	MKO-D037-№23	12.4	5	突出気味の平底をもち、体部は直線的に開く。	外－絞り目状の亀裂 内－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	黄灰色
10	鉢	MKO-D037-№20	12.3	5.1	箱形に近く、口縁端部は丸く納める。	外－絞り目状亀裂と指押さえ 内－板ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	黄白色
11	鉢	MKO-D037-№43	13.2	6.1	口縁部は短く屈曲する。	外－ナデ 下半部はケズリ 内－ナデ	1－2㎜大の砂粒多い	黄白色
12	大鉢	MKO-D037-№17	29.8		口縁部は強く屈曲して短く水平に開く。 端部はわずかに肥厚する。	内外－ナデ	1－3㎜大の砂粒多い	黄褐色
13	大鉢	MKO-D037-№51			強く折れて水平に短く開く口縁部。	外－？ 内－指押さえ	1－4㎜大の砂粒多い	淡橙色
14	二重口縁壺	MKO-D037-№5	19.6		中位で強く屈曲してあまり開かない口縁部。 端部は外反してやや肥厚する。	内外－横ナデ	1－2㎜大の砂粒赤色粒少量	黄白色
15	広口壺	MKO-D037-№35	19.4		ラッパ状に開く口頸部。 口縁部は僅かに外反する。	外－ナデ 内－押さえ 接合痕のこす。	1－2㎜大の砂粒赤色粒少量	黄白色
16	広口壺	MKO-D037-4	19.2		直立する頸部から強く折れて水平に短く 開く口縁部。体部の張り強い。	口縁部－横ナデ 体外－粗いハケ	2－4㎜大の砂粒	黄白色
17	小型器台	MKO-D037-南端	8.4	12.2	坏部中央に貫通孔、口縁端部は弱く摘みあげる。脚部は内湾気味に伸びる。	内外－ハケ調整	1－2㎜大の砂粒	淡橙色
18	高坏	MKO-D037-№11	6.7		深目の坏部で底面は狭い。 中位で屈曲して直線的に開く。	内外－ナデ	1－2㎜大の砂粒 赤色粒 多い	黄白色
19	高坏	MKO-D037-№18	14.6		深目の坏部で底面は狭い。 中位で屈曲して直線的に開く。	外－縦ハケ 内－ナデ	1－2㎜大の砂粒	黄灰色
20	高坏	MKO-D037-№25	14.2		深目の坏部で底面は狭い。 中位で屈曲して直線的に開く。	外－ハケ調整をナデ消す 内－ナデ	1㎜大の砂粒 赤色粒	灰白色
21	高坏	MKO-D037-№40	15.2		深目の坏部。中位で屈曲して直線的に開く。	外－ハケ 内－ミガキ	1－2㎜大の砂粒	黄白色
22	高坏	MKO-D037-№44			やや中膨らみの軸部	外－ミガキ 内－下半横ケズリ	1－2㎜大の砂粒 多い	淡橙色
23	高坏	MKO-D037-№31			やや中膨らみの軸部から強く折れて開く裾部	外－ハケ 軸内－上半絞り目 下半横ケズリ	2㎜大の砂粒多い。	淡橙色
24	高坏	MKO-D037-1			やや中膨らみの軸部から強く折れて開く裾部	外－ミガキ 軸内－横ケズリ 裾内－ナデ	2－4㎜大の砂粒	鮮橙色
25	高坏	MKO-D037-№12			やや中膨らみの軸部から強く折れて開く裾部	外－？ 軸内－絞り目 裾内－ナデ	1－2㎜大の砂粒 赤色粒 多い	黄白色 18と同一個体か
1	甕	MKO-D037-南端	15.0		外反気味に短く開く口縁部と張りの強い体部	外－並行叩き 内－指押さえ	1－2㎜大の砂粒 とくに雲母多い	茶褐色
2	甕	MKO-D037-下層	13.5		短く開く口縁部。体部最大径はかなり低い。	外－口縁部以下並行叩き、体部は縦ハケ加える。内－下半部粗い縦ケズリ	2㎜大の砂粒	濃橙色
3	甕	MKO-D037	19.4		外反して強く開く口縁部。体部は張り強い。	外－？ 内－指押さえ	1－4㎜大の砂粒 多い	黄灰色
4	甕	MKO-D037-№48	14.8		比較的長く伸びる口縁部	口縁部－横ナデ 体外－ナデ 体内－横ケズリ	1－2㎜大の砂粒	暗灰黄色
5	甕	MKO-D037-№41	13.7		強く折れて直線的に開く口縁部。 端部は小さく肥厚する。	口縁部－ナデ 体外－ナデ 体内－指押さえ	2－3㎜大の砂粒	淡茶褐色
6	甕	MKO-D037-№57	12.6		強く折れて直線的に開く口縁部。 端部は小さく肥厚する。	内外－ナデ調整	1㎜大の砂粒少量 かなり精良な胎土	明橙色
7	甕	MKO-D037-№1	13.4		強く折れて短く開く口縁部。端部は摘みあげる。体部は撫で肩 東阿波型甕模倣形態	口縁部－横ナデ 体外－緻密な斜ハケ 体内－顕著な指押さえ	1－2㎜大の砂粒多い	灰白色
8	甕	MKO-D037-1	13.7		強く折れて短く開く口縁部。端部は摘みあげる。体部は撫で肩 東阿波型甕模倣形態	口縁部－横ナデ 体外－緻密な斜ハケ 体内－顕著な指押さえ	1－2㎜大の砂粒	黄灰色
9	甕	MKO-D037-№19	13		強く折れて短く開く口縁部。端部は摘みあげる。体部は撫で肩 東阿波型甕模倣形態	口縁部－横ナデ 体外－緻密な斜ハケ 体内－顕著な指押さえ	2㎜大の砂粒	黄白色
10	甕	MKO-D037-№23	15.2		強く折れて短く開く口縁部。端部は摘みあげる。体部は撫で肩 東阿波型甕模倣形態	口縁部－横ナデ 体外－緻密な斜ハケ 体内－顕著な指押さえ	2㎜大の砂粒	灰褐色
11	甕	MKO-D037-№21	13.9		弱く開く短い口縁部。体部は張り強い。	口縁部－横ナデ 体外－ミガキ 体内－上半部指押さえ 以下横ケズリ	2－4㎜大の砂粒	黄白色

第3表　ＳＤ37出土資料観察表

（7）　追記

上記した買田岡下遺跡の調査内容は平成５年１月末日段階のものであるが，同文作成後，２月末までの調査で新たな知見を得ることができた。以下その内容について略述する。

II区の調査

II区西・東部を中心に包含量や遺構面上においてサヌカイト剝片を採取し，その風化度合いから旧石器時代資料を含むとの推定を先に述べた。そのため平安時代以降の遺構の調査が完了した後に，それの包蔵状況を確認するために遺構面以下の調査を実施した。調査は，II区東・西部に２ｍメッシュを設定して水平・垂直分布を確認しつつ掘り下げを行なった。

この部分の遺構面（地山層表層）は主に淡黄色～黄灰色のシルト質土からなり，下位に堅緻な黄褐色粘土層が認められる。II区西部から東部にかけて下部の黄褐色粘土層が帯状に落ち込む部分，すなわち小規模な埋積谷を検出した。遺構面下0.2mで検出し，かなり蛇行しつつ南西から北東に抜ける。最大幅15m程度，深さ１ｍを測り，上層に黄灰色細砂層，下層に黄褐色粗砂層が堆積する。また局部的に最下層に植物遺体を含む黒色シルト層を見る。

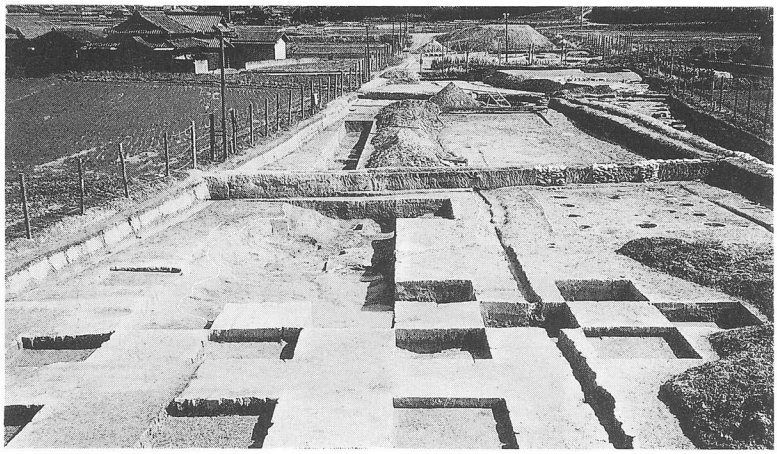


写真17　II区全景

縄文時代晩期の土器片若干と石鏃・スクレイパー等が出土した。形態から晩期以前にさかのぼりうる石鏃やきわめて風化の進んだサヌカイト片もわずかながら含まれるが，明確に旧石器時代に位置付け得る資料はない。遺物量は少なく，その多くは埋積谷中に混入したものと思われる。他ではサヌカイト細片等が地山表層に散漫に包含される程度で顕著な集中地

写真18　II区埋積谷、縄文土器出土状態

点はない。また埋積谷植物遺体包含層から少量の堅果類を採取した。

VI区の調査

本調査区はⅠ区西部の北隣の宅地跡で，地形的にはⅠ区中・西部に続く平坦地である。平安時代前半の建物・溝，室町時代前半の建物・溝・土杭，江戸時代の建物など3時期にわたる遺構を検出した。平安時代の遺構は調査区北西部に比較的集中する傾向がある。それらはⅠ区西部・II区とほぼ同時期とみられる。なお南隣のⅠ区西部では平安時代前半の小溝群（畝状遺構？）が展開するが本区には続かない。逆にⅠ区西部には平安時代の建物群は広がらない。

本遺跡では先に述べたように，室町時代前半の遺構としてⅠ区中部で宅地1区画などを確認しているが，本区全域に広がる室町時代遺構はほぼ同時期の所産である。まだ建物復元が十分に行えていないので棟数・配置は定かではないが，柱穴規模等から判断すればⅠ区中部建物群と同規模程度の建物を想定してよいであろう。しかし同地区におけるような建物群を区画する溝は確認し得ていないとともに，方形土杭を伴う建物も未確認という違いがある。

江戸時代の建物は中央部で1棟だけ検出した。比較的大型の東西棟で柱穴より出土した伊万里皿から18世紀代に比定できる。この期の遺構は他にない。

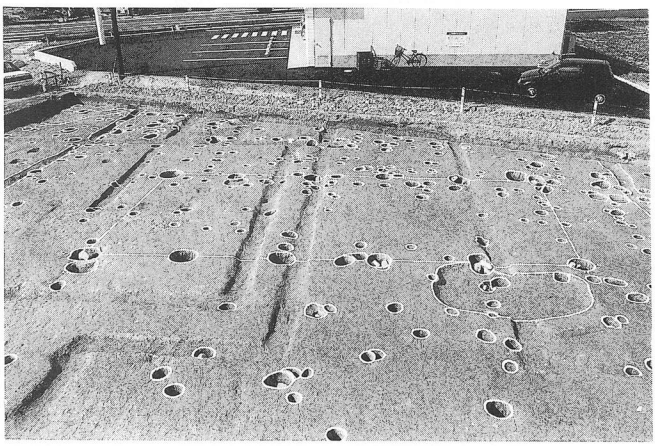


写真19　VI区全景

III. 整理業務の概要

1．林・坊城遺跡

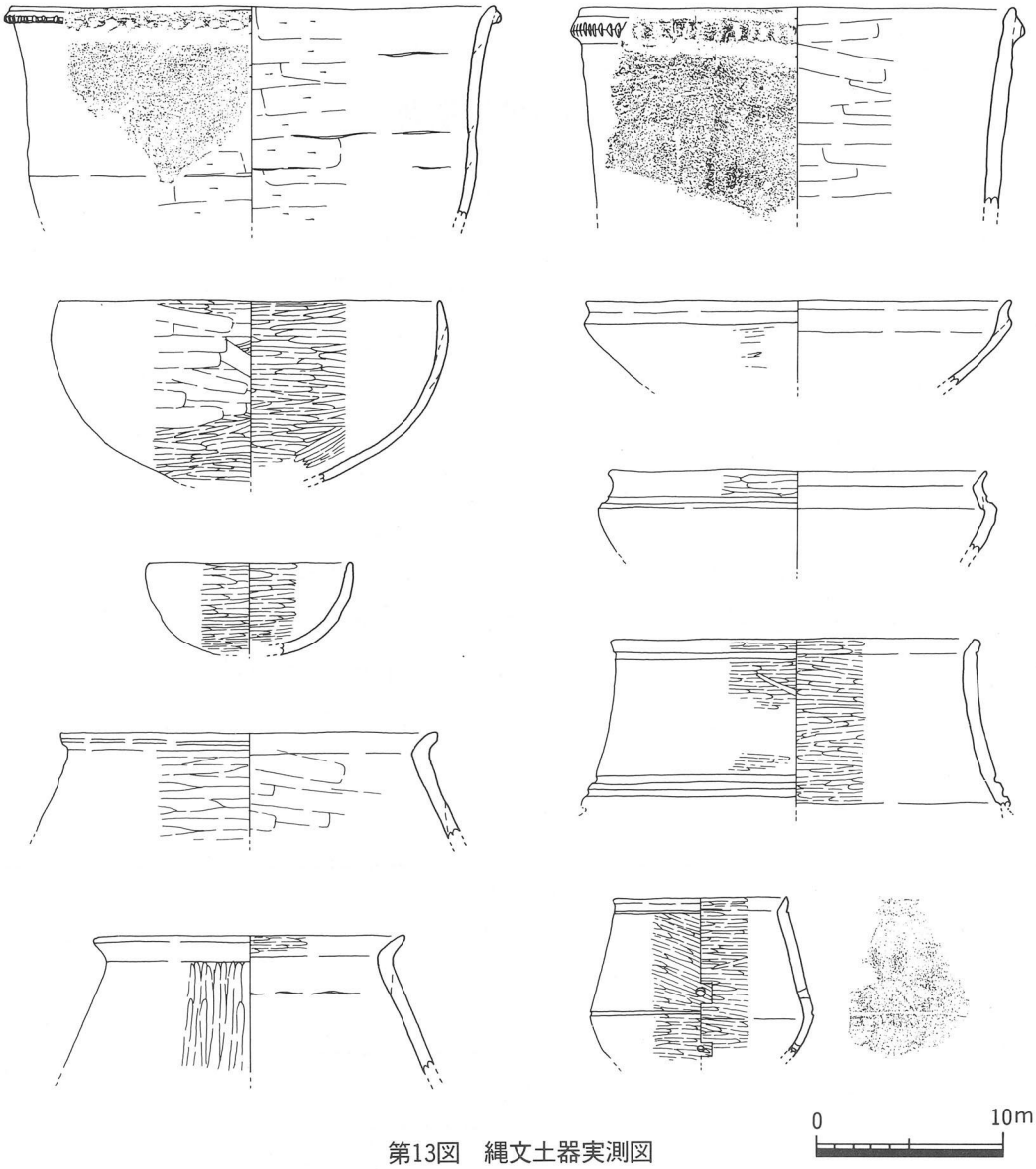
林・坊城遺跡は，高松市林町に位置し，高松東道路の建設に伴い，昭和63年度に調査を実施した。調査の結果，縄文時代晩期から近世までの遺構・遺物を確認している。遺構は後世の削平を受けているため，遺存状態はあまりよくない。遺物は縄文時代晩期の突帯文土器と，円形周溝状遺構から出土した弥生時代後期の供献土器が大半を占めている。特筆すべき遺物として縄文時代晩期の木製農耕具類（諸手鍬・えぶり等）がある。縄文時代晩期の木製農耕具類は県下では初の出土であり，全国的にみてもきわめて例の少ないものである。これらの木製農耕具類は日本における稲作開始の時期のみならず，弥生時代の始まりの問題とも関連する意義深いものである。

整理作業は平成３年８月から継続して実施している。昨年度は図面・写真類の整理，遺物の選別・台帳作成などの基礎的整理および，土器を中心とした遺物の実測作業を行い，これらと並行して樹種同定・木製品の保存処理を委託した。今年度は石器・木製品の実測，遺物の写真撮影，遺構図面等のまとめ，遺構・遺物実測図のトレース，原稿の作成・編集などを実施し，平成４年９月30日をもって14ヵ月にわたる，林・坊城遺跡の整理作業を終了した。

なお，報告書の刊行は平成５年度を予定している。

作業内容＼月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
遺物実測・拓本						
遺構・遺物図面トレース						
遺物観察表作成						
遺物写真撮影						
原稿執筆・編集						

第４表　林・坊城遺跡整理作業工程表



第13図　縄文土器実測図

写真20　林・坊城遺跡整理作業風景

2．前田東・中村遺跡

前田東・中村遺跡は高松市前田東町に位置する。高松東道路の建設に伴い，昭和63年８月～平成３年11月まで途中に中断をはさみながら，足掛け４年の歳月をかけて32,680㎡を調査し，さらに平成５年度も1,620㎡の調査が予定されている。全体の調査対象面積は34,300㎡となる。

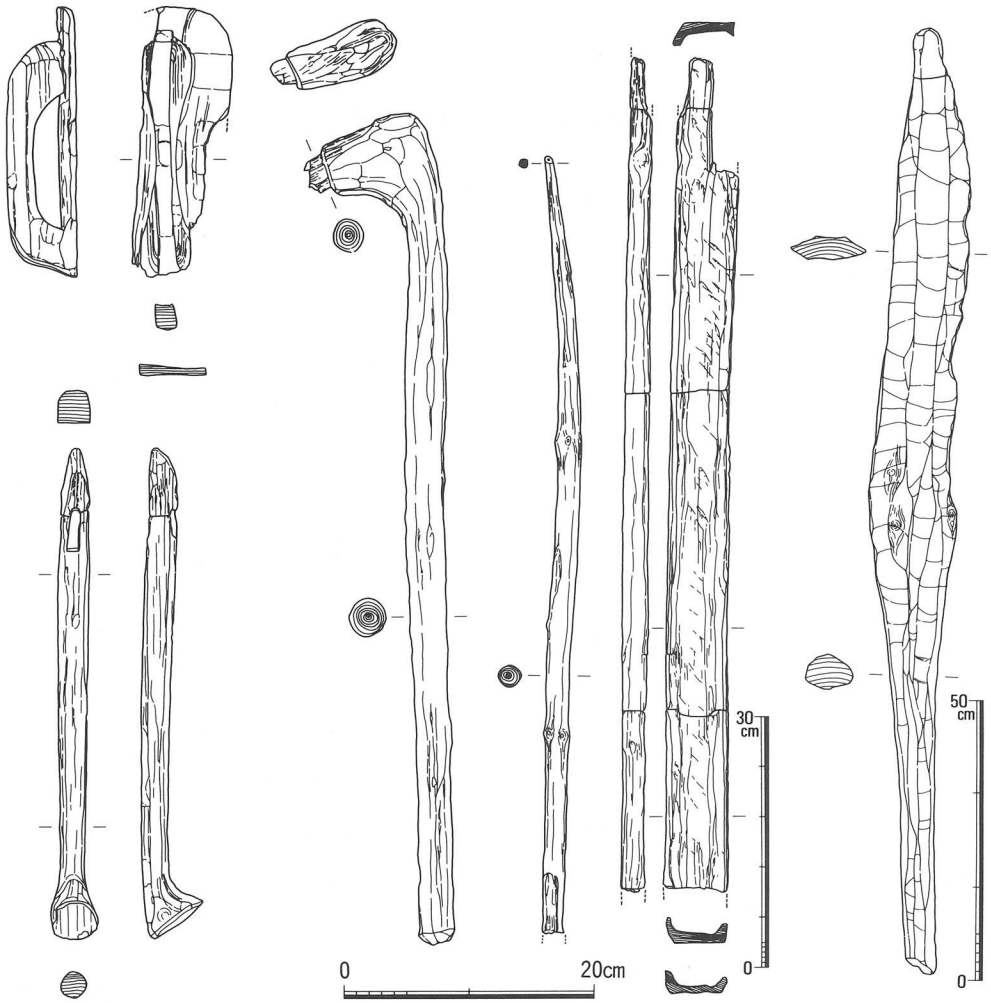
遺跡は扇状地上に立地し，東から西へとゆるく傾斜している。調査によって縄文時代後期から中世にかけての自然河川や集落・墓地などを確認した。各時期ごとに述べると縄文時代後・晩期の自然河川，弥生時代中期から後期の周溝墓・自然河川，古墳時代前期から中期の自然河川，古代の掘立柱建物群・自然河川・平窯などが見つかっている。遺跡の特徴としては瓦の多量の出土，墨書土器・硯・帯金具（巡方）の存在，弥生時代から古墳時代の木製のさまざまな道具や古代の人形・斎串などの祭祀遺物の出土などがあげられる。いずれも県内ではあまり出土例のみられなかったものであり，今後の香川の歴史像解明にむけての基礎資料となりうるものである。また掘立柱建物群の性格も当時の讃岐の社会像の構築にひとつの光を投げかけるであろう。

整理作業は平成４・５年度の２ヵ年をかけて，２名の職員によって進められている。本年度は注記・接合・遺物実測・遺物写真撮影・報告書図版作成・原稿執筆を行なった。木器・石器は実測を終了し，それぞれ約600点・250点を数えた。また土器実測も3,000点まで進むことができた。その結果，調査中に目の届かなかった土馬や弥生時代中期後半の製塩土器の良好な資料の存在も明らかになった。

なお，来年度の整理作業はひきつづき土器実測・遺物写真撮影・報告書図版作成・原稿執筆・編集・遺物等の整理収納・木製品の保存処理を行なう予定であり，報告書の刊行は平成６年度となる。

作業内容＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
注記・接合												
遺物実測												
遺物写真撮影												
報告書図版作成												
原稿執筆												

第５表　前田東・中村遺跡整理作業工程表



第14図　C区自然河川内出土木製品

写真21　前田東・中村遺跡整理作業風景

国道バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報
平成４年度

平成５年３月31日

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
発行　香川県埋蔵文化財研究会
印刷　㈱成光社